

路地裏に立ち並ぶ、窓の少ない無機質なビル群。都会の喧騒から隔絶されたような、どこか冷ややかで重苦しい空気が漂う場所。地図アプリが指し示す目的地は、その中でもひとときわ古びた、看板一つ出していないコンクリートの建物だった。

(……ここで、本当に合ってるのかな。インターホンもあるし……)

私はスマートフォンの画面を握りしめ、無機質なコンクリートの壁を見上げた。

数日前、ネットの片隅で見つけた『短期撮影モデル』の募集。提示された条件は、三時間で十五万円という、にわかには信じがたい破格の報酬だった。

もしかしたら怪しいバイトかもしれない。でも今の私にとって、それは怪しさよりも魅力が勝った。

(……とりあえず、行ってみよう。だって十五万円だし……。それにただの撮影だし、変な雰囲気だったら、すぐに謝って帰ればいいんだから。……たぶ

ん)

自分に言い聞かせるように、空を見上げて深呼吸をした。そして、鉄扉の横にある、冷たい質感のインターホンを押した。数秒の静寂の後、ジィィ……というノイズと共に、低くて温度を全く感じさせない男性の声が響く。

「……開いている。入ってくれ」

「え、でも……」

「いいから、中に」

「は、はい……！」

重い扉を押し開けると、そこには外の湿気とは対照的な、乾燥した冷気が漂っていた。高い天井、床を這う黒いケーブル。スタジオの奥で、大きなモニターを凝視している一人の男性の背中が見えた。

「失礼します……。本日、モデルの件で伺いました」

私の声が、広いスタジオに頼りなく反響する。男性がゆっくりと椅子を回転させ、こちらを振り向いた。

(……えっ？)

思わず息を呑んだ。そこにいたのは、今まで見てきたどんな芸能人よりも、衝撃的なまでに整った顔立ちをした男性だった。

陶器のように白い肌に、ナイフのように鋭く高い鼻筋。少し長めの黒髪の間から覗くその切れ長の瞳は、深い夜のように美しい。影のある端正な輪郭は、まるで精巧に作り上げられた動く彫刻のようだ。

(な、なに……この人……っ。信じられないくらい、かっこいい……。彫刻みたいに端正で、冷たいのに……圧倒されるくらい綺麗……。モデルの募集だと思って来たのに、この人自身がトップモデルなんじゃないかって思うくらい、綺麗……っ)

あまりのイケメンぶりに、心臓が跳ね上がり、頭の中が真っ白になる。

「ああ、どうも。……うん。思ったより『素材』としては悪くないね」

南条究也と名乗ったその男性は、私の全身を値踏みするように一瞥すると、そう言った。一瞬、なんて上から目線で傲慢なんだろう。そう思ったけれど、これだけ美形の人に言われると、ぐうの音も出ない。

「では早速確認させてもらおうか」

「か、確認、ですか……？」

「そうだ。募集していたサイトにも書いてあったはずだ。当日に僕の方でモデルに適切な人物かを確認すると」

（う、嘘！読んでなかった。これ、ひょっとして適切じゃなかったら、モデルの仕事はできないってこと……？）

究也さんは椅子から立ち上がると、ゆっくりと私の方へ歩み寄ってきた。

モデルのような高い身長が、私の前に大きな影を作る。スタジオの空気はひんやりとしているのに、彼から漂う冷たくて甘い香水の香りに、頭がクラクラしてしまいそうだ。

「そこに座って。……まずは、君が僕の求める『素材』として合格かどうか、確かめさせてもらうよ」

彼が指差したのは、スタジオの真ん中に置かれた、真っ黒な高い椅子だった。私は言われるままにその椅子に腰を下ろした。

「し、失礼します……っ」

(……これで帰されたらどうしよう。十五万がパーになっちゃう……。なんとか合格もらわなきゃ……！)

究也さんは私のすぐ目の前に立ち、鋭く熱い瞳で

私をじろじろと眺めた。

「緊張しすぎだ。肩に力が入りすぎている。そんなことでは、良い『表情』は撮れないよ」

「す、すみません……っ。初めてなので、どうしても……」

「いいよ、無理に解かなくて。……まあ、見方を変えれば、緊張した表情も素材としては悪くない」

その時、それまで私の顔をじっと見つめていた究也さんの左手が、私の太ももに伸びてきた。

「えっ……！？ あ、あの……っ」

驚いて身体を強張らせると、彼は至近距離で私を射抜くように見つめたまま、感情のわからない声で淡々と言った。

「……緊張しているね。肌が粟立っているのが、指先から伝わってくるよ」

「そ、それは……あの、手が、……っ」
「動かないで。君の肌の質感を確かめているだけだ。
……うん、いいね。」

究也さんの指先が、スカートの裾から覗く生足の
柔肌を、這い回る蛇のようにゆっくりと撫で回す。
さわさわ♡ さわさわさわ♡

「んっ、あ……、ふあぁっ……」
（や、やだ……っ。究也さんの手が……。モデルの
確認って、足とかも触るの？ みんなそうなの？）
「……いい肌だ。しっとりとしていて、手に吸い付
いてくる」
「あ、の……っ、でも、恥ずかしくて……っ！♡
ひゃっ……！♡」

節くれだった大きな手のひらが、膝の裏から太も
もの付け根にかけて、すすす、と滑っていく。じわ
じわと熱い塊になって、全身に快感が広がっていく
のがわかる。

そのまま指先が太ももの内側へと移り、上へ上へと上がっていく。スカートが捲れる音が、やけにはっきりと聞こえた。

（どうしよう……究也さんの指が、どんどん上の方に……。このままだと、おまんこに触れられちゃう……っ♡）

「今の声、いいよ。もっと、出して」

「あ、……っ、ん、あ……っ♡ 究也、さん……っ♡」

「少し熱くなってきたようだ。指を這わせるだけで、君は、自分の体がどんな風に反応しているか自覚しているかい？」

その声が再び響くと同時に、さらに身体がカァァと火照っていく。

指先が、下着の布越しに私の割れ目の境界を、掠めるようにして、太ももの付け根を何度も、何度も往復する。